

Title	科学を通じた町興しの提案：欧州におけるサイエンスフェスティバルを事例に(科学コミュニケーション, 一般講演, 第22回年次学術大会)
Author(s)	渡辺, 政隆
Citation	年次学術大会講演要旨集, 22: 665-666
Issue Date	2007-10-27
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/7362
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

科学を通じた町興しの提案 ——欧州におけるサイエンスフェスティバルを事例に

○渡辺政隆（文部科学省 科学技術政策研究所）

1. はじめに

科学技術を社会に浸透する方策として科学技術コミュニケーションの理念に立った地域活動が徐々にではあるが増え始めている。しかしそうした活動は未だに散発的かつ小規模に行われているものが多く、地域コミュニティ全体を巻き込む動きに乏しい。欧州、特に英国では、サイエンスフェスティバルを開催することで地域コミュニティへの科学の浸透と観光客の誘致を図っている事例がある。そうした事例の開催関係者への聞き取り調査を踏まえ、町興しとサイエンスコミュニケーション促進を目的としたサイエンスフェスティバルの可能性について論じたい。

2. 歴史的経緯と現状

映画祭や音楽祭など、観光行事としてのフェスティバルは以前から世界各地で盛んに行われてきた。そのなかにあつて、サイエンスフェスティバルの歴史はそれほど古くはない。世界最初と思われるサイエンスフェスティバルは、英国スコットランドの首都エディンバラにおいて 1989 年に開始されたものと思われる。エディンバラはそれ以前から音楽、映画、文学などのフェスティバル都市として知られていた。市当局は、フェスティバルの端境期にあたる春先に新たなフェスティバルの開催を検討し、サイエンスフェスティバルを企画し、イースター休暇の 1 週間に開催するに至った。

エディンバラ市当局の当初のもくろみは観光収入の増加であったが、現在はむしろ、文化的価値を重視する方向に方針転換されている。現在の市の年間フェスティバル総収入は 1 億 3800 万ポンドだが、そのうち国際サイエンスフェスティバルの収入は 150 万ポンドと決して多くないからである。それでも実施する効用は以下のとおりだという。

- ▶ 人々にサイエンスという新しい文化を体験させる。
- ▶ 特に子どもたちへの教育的効果。
- ▶ エディンバラ大学をはじめとする地元の大学・研究機関の科学技術力を一般に示す。
- ▶ たとえ年に 1 回であれ、エディンバラという都市、ひいてはスコットランドを科学技術（特にライフサイエンス）に強い都市（国）として世界にアピールできる。

一方、ロンドンの北西 140km に位置する観光都市チェルトナムでは、2002 年から毎年 6 月の 5 日間、サイエンスフェスティバルが開催されている。チェルトナムでも、それ以前から文学、クラシック音楽、ジャズ、フォーク音楽のフェスティバルが開催されていた。そこにサイエンスフェスティバルが加わったのは、行政主導で行われたエディンバラ市とは異なり、2 人の著名なサイエンスコミュニケーターが新しいスタイルのサイエンスフェスティバルの実施を思い立ち、フェスティバル開催で実績のあるチェルトナム市に話を持ちかけたことによる。

エディンバラにおけるサイエンスフェスティバルは、街中のあちらこちらでさまざまなイベントが開かれ、メイン会場では日替わりのトークイベントが開かれるというものだった。それに対してチェルトナムで企画された新しいスタイルとは、会場を 1 カ所に限定し、イベントは大人向けのディスカッションを中心に実施するというものだった。この都市には大きな研究大学や科学館もないことも、特色の 1 つである。すなわち年に 1 回だけ著名な講演者を招いたトークイベントを開催することで、逆にマンネリ化を避けられるだろうという思惑なのだ。また、若いサイエンスコミュニケーターのコンテストである FemLAB をテレビ局と共同開催することで、メディアへのアピールも心がけている。

一般に英国では 3 大サイエンスフェスティバルという言い方がされている。3 つ目のサイエンスフェスティバルは、英国科学振興協会（BA）が毎年 9 月に 1 週間の期間で実施している BA サイエンスフェスティバルである。BA は 1831 年に創設されて以来、毎年 1 回、年次総会を英国各地の都市で開催してきた。2000 年からはその呼称を BA サイエンスフェスティバルと変え、継続している。ただしこれ

に関しては、他の2都市のサイエンスフェスティバルとは異なり、科学者と一般の知識人が交流し、互いに新しい科学研究の流れを知るためのイベントという色彩が濃い。呼称を変更したのは、より親しみやすい雰囲気を出すためと、学校の生徒向けやファミリー向けのイベントも盛り込む必要を感じたためだという。BAサイエンスフェスティバルのいちばんの特徴は、メディアによる報道量が図抜けて多いことである。会場のプレスルームには数多くのメディア関係者が集い、1年で最も科学技術報道の多い期間となる。

そのほか欧州では、2004年から1種のNPO組織である「ユーロサイエンス・オープン・フォーラム(略称ESOF)」が隔年開催でサイエンスフェスティバルを開催している。開催地は毎年違い、第1回はストックホルム、第2回はミュンヘン、2008年の第3回はバルセロナが予定されている。これは、形式的にはBAサイエンスフェスティバルを参考にしたものだが、サイエンスコミュニケーターとジャーナリストを中心に企画運営されている点が特色である。2006年から開催されたわが国のサイエンスアゴラは、このESOFを参考にした点が多々ある。

表 主なサイエンスフェスティバルの比較

サイエンスフェスティバル(SF)名	エディンバラ国際SF	チェルトナムSF	英国科学振興協会(BA)SF	ESOF	サイエンスアゴラ
歴史	1989年から毎年	2002年から毎年	1831年から毎年(ただしSFと改名されたのは2000年。それ以前は年会)	2004年から隔年開催	2006年から毎年
開催時期・期間	イースター(春)の2週間	毎年6月の5日間	毎年9月に1週間	夏季の1週間	11月の3日間
開催場所	エディンバラ(英国)	チェルトナム(英国)	英国各都市	欧州各都市(ストックホルム、ミュンヘン)	国際交流村・日本科学未来館(東京・台場)
延べ入場者	7万人	6~7万人	17万人(2006年)	2100人(2006年;同時に開催した科学技術週間のミュンヘン地区の参加者は7万人)	3700人
特色	街全体を会場に多彩な催し	タウンホールとテントのみに集中。トークイベントが中心	開催都市の大学が中心。異分野交流的な学会の年会形式	サイエンスコミュニケーションの草の根組織が主催する討論が主体	サイエンスコミュニケーション促進が主眼
実施主体	NPO傘下の会社組織(常任スタッフ12名)	NPO(SF担当の常任スタッフは3名)	BA(SF担当の常任スタッフ2.5人)	開催都市のNPO	JST(常任スタッフ1.5人)
予算規模	会社の年間予算100万ポンド中の50万ポンド	35万ポンド	53万ポンド		3000万円
支援協賛団体	市、地元企業、地元大学他	市、地元企業他	政府、開催自治体、開催大学、企業他	EU、開催地政府他	日本学術会議他

3. サイエンスフェスティバルの効用と限界

何をもちてサイエンスフェスティバルと呼ぶのかについては議論があるが、ここではその語源に鑑み、祝祭的雰囲気を湛えていることを1つの要点としたい。経済効果から言うと、サイエンスフェスティバルの効率は必ずしもよいとはいえない。地方都市で実施する場合、近隣の親子連れを引き寄せることはできるが、観光都市であったにしろ、その時期にサイエンスフェスティバル見物を兼ねて遠隔地から足を運ぶ観光客は決して多くはないからである。

しかし、教育効果、文化的な価値として見ると、地域の科学技術振興、科学教育の場、サイエンスコミュニケーション活性化方策としての重要性は高い。また、研究者のアウトリーチの場としても積極的に活用できる。つまり、観光産業興隆策としてではなく、サイエンスコミュニケーターを媒介とした科学技術者と市民との交流の場として、またインフォーマルエデュケーションの場として有効なイベントであると考えられる。

欧州、特に英国では、サイエンスコミュニケーションが1つの産業として成立し始めており、サイエンスフェスティバルもその中に組み込まれている。今年10月には、マンチェスターでもサイエンスフェスティバルが新たに開催される予定であり、またチェルトナム方式のサイエンスフェスティバルを米国セントルイスに「輸出」する計画もあるという。

わが国においては昨年からサイエンスアゴラが開催されるようになった。しかし、より祝祭的色合いの濃いサイエンスフェスティバルを地方都市で開催する意義は大きいと考えられる。